《畜産講座》

離乳前後の子豚に発生する下痢対策

離乳前後の子豚が下痢を発症すると、後々の豚の発育に影響し、養豚経営に及ぼすダメージは大きい場合もあります。子豚の下痢には様々な原因がありますが、その中でもつぎの原因が主な物です。

① 子豚の過密

② 母豚のストレス

③ 豚舎の環境

④ 餌付または飼料の切替

⑤ 疾病そのものが原因（寄生虫、細菌、ウイルスなど）

①『子豚の過密』が原因の場合

豚の繁殖をおこなっていると、どうしても分娩が重なり、離乳豚舎が過密になってしまう時期があります。この様な場合、子豚は疾病に感染するリスクが高くなります。分娩豚舎や離乳舎で起こる子豚の疾病の中でも、特に下痢症は問題です。分娩が重ならないように母豚の種付けサイクルをコントロールし、子豚の密度を適切に保つことが望ましいのですが、夏季に母豚の飼料摂取量が減少し、受胎率が低下したり、育成豚の種付けが重なったりすると、なかなかうまく行かない場合もあります。特に、育成豚などは２回目～３回目の初期の発情で種付けを確実に行わないと、その後の受胎率が極端に低下する場合が

多いので、確実に種付けをする必要があります。

子豚が過密状態で飼育されると、【子豚が過密→飼料を食べる量にバラツキが出る＋病気になりやすくなる→子豚の発育にバラツキが出る】といった悪い流れになってしまいます。

○子豚が過密な場合の応急処置

・ 基本的に離乳豚舎を余分に新設することが望ましいのですが、なかなか豚舎の新設が困難な場合もあります。
・ 離乳豚舎にいる子豚の数を減らす。→子豚が分娩舎にいる期間を伸ばす。＋離乳豚舎から育成豚舎や肥育豚舎に移動する時期を早める。（この場合、離乳豚用の飲水器や給餌器を育成豚舎や肥育豚舎に増設する必要があります）
・ 子豚の販売が可能であれば子豚販売を行い、子豚の数を減らす。

②『母豚のストレス』が原因の場合

子豚が下痢をする場合、母乳量の低下や質の悪化も考えられます。分娩豚舎に母豚を移動するのは少なくとも 10 日前程度に行い、母豚のストレスを最小限にする必要があります。

③『豚舎の環境』が原因の場合

分娩豚舎や離乳豚舎の温度が低いと、子豚の下痢につながる場合があります。子豚の状況を観察し、温度を調節します。特に離乳直後の子豚は普段よりストレスを感じているため、若干温度を上げる必要が

あります。また、離乳豚舎から、育成豚舎や肥育豚舎に移動する場合、早めに廃温し、外気温にならす必要があります。一方、冬場などは育成豚舎でも温源が必要な豚舎もあります。

○畜舎の環境を見直す。

保温は出来ているか？湿度は適切か？換気量も適切か？など、子豚の状況を観察しながら畜舎の環境を見直してみる必要もあります。

④『餌付または飼料の切替』が原因の場合

子豚への餌付は注意が必要です。一度に多量の人工乳を給与すると、お腹のすいた子豚は食べ過ぎてしまい、下痢を発症します。母乳の出が悪い腹の子豚には、特に注意し、餌付用人工乳を小量ずつ給与することが必要です。また、餌付は通常、５－７日齢に行いますが、餌付の時期が遅れてしまうと、子豚が人工乳を食べなかったり、逆に食べ過ぎたりしてしまい、下痢になる場合もあります。子豚の腸が人工乳になれてしまえば、下痢をせずに人工乳を多量に食べることが出来るようになります。また、下痢になった場合、早めにつぎの段階の人工乳に切り替えると下痢が止まることもあります。餌付は通常、人工乳を半日～１日で食べきれる分をパラパラ撒く程度に給与し、余った物は廃棄します。最初は子豚が鼻で遊ぶ程度で十分です。一度に人工乳を沢山給与し、何日も給餌器に食べない人工乳がある状態だと、人工乳が変敗し、子豚に下痢を引き起こすこともあります。子豚が順調に人工乳を食べ出すと、給与量を増しても大丈夫です。ただ、不断給与

で人工乳を多給しても、給餌器内で水分を含み固まった物や、カビが生え固まったものは丹念に取り除く必要があります。人工乳が入った給餌器を置く場所は、母豚の尿や糞が入らない場所にします。糞や尿が入ると、子豚も糞や尿を給餌器内にするようになります。しかし、あまり、母豚の頭の近くだと、母豚に人工乳が食べられてしまいます。そこで、保温箱内などに餌付用給餌器を入れる方法もあります。保温箱内に給餌器を置くと、飼料の追加給与が面倒ですが、子豚は快適に飼料を食べることが出来ます。

離乳直後は授乳時に使っていた給餌器を併用して使うようにします。離乳は子豚にとって、ストレスになるので、離乳直後に給餌器が変わると、食下量が低下すると言われています。

また、飼料を急に切り替えると、子豚が消化不良を起こすことがあります。この様な栄養性の下痢から大腸菌性の下痢などの感染性下痢に移行する場合もありますので徐々に飼料を切り替える慎重さが必要です。ただ、軟便程度で、子豚が人工乳をよく食べ、丸々太っている場合は放置しても大丈夫です。

【写真】哺乳中の子豚

子豚は発育速度が速いので、十分な母乳や人工乳を必要とします。

⑤『疾病そのものが原因』の場合

下痢便の検査をし、主な原因を特定する必要があります。特に、伝染性疾病や寄生虫の場合は根本的に対策を行わないと改善しません。一般的な感染症の場合は母豚に対し、ワクチン接種を行い、初乳の移行抗体レベルを上げることも有効です。大腸菌症など様々なワクチンが市販されているので、獣医師に相談し、適切なワクチンを選択する必要があります。ワクチンも過剰投資にならないように、選択的に投与する必要があります。

また、畜舎の洗浄消毒、分娩舎へ母豚を入れるときの豚体消毒などをもう一度チェックする必要があります。

どうしても、下痢になってしまったら、経口補水液の給与や抗生物質の投与を考えなければいけません。

簡単な経口補水液の作り方：次の割合で、よく混ぜます 水１リットル＋砂糖大さじ 4.5（40g）＋塩小さじ 1/2（3g）

経口補水液を給与するときは乳を飲まさず、経口補水液を少し温めて給与します。子豚が飲まない場合は注射器やスポイトなどを使って強制的に給与する必要があります。子豚が補水液を飲んで活力がでてきたら、母乳を飲ませて様子を見ます。また、下痢予防のために砂糖を人工乳に混ぜる方法が有効な場合もあります。

しかし、あくまでもこれは最終的な選択です。まずは、管理方法の改善により、下痢を予防することが、生産性の向上に直結します。

子豚の下痢対策は「これだ！」といった、決定的な対策がない場合が多く、いくつかの対応策を組み合わせ、総合的な対策を実施することが有効な場合が多いです。各農家のパターンに合った対応方法を見つけることが、大切です。

（生産環境部　前田）